

深緑色の鉛筆

えみや 真布

「妻とは別れる、結婚しよう」と言つた圭介に答えなければいけない。思えば思うほどに、ざわめきは大きくなつた。これは鳥のさえずりだ。そう思つて野村美沙は目を覚ました。つんざくような鳴き声が、まだ耳の底に甲高く響いている。数十羽、いや数百羽の鳥のうごめく翼、頭、目、くちばし。まだその夢の中にいるような稀薄な意識のままベッドをでた。ベージュのカーテンをすり抜けた春の朝陽が、部屋にこぼれ落ちてゐる。耳に残るけたたましい余韻を振り払うように、洗面台へ向かう。ぼんやりしている顔を鏡に映した。頬に手を当ててから唇を指でなぞる。美容部員という仕事柄、周りの人に「化粧すれば十歳は若返る」と言われる。そのときは素直に嬉しいのだが、今の寝起きの素顔は四十二歳そのものだ。先週の別れ際の圭介の言葉が浮かんだ。

「妻とは別れる、結婚しよう」
私立高校の教師である五十三歳の川井圭介と出会つたのは二年前。当時、新人を指導するチーフになつていた美沙の周りには、結婚をして母になつた同僚、仕事に生きようとすゝる先輩、遊びだけに明け暮れる友などがいたが、そんな中で美沙は気づかぬまに、どれか一つだけを選び取らない曖昧さを享受していたのかもしれない。最後の恋かもしれない、そんな予感を頼りに圭介のやさしさに溺れていった。不倫という蔑視される仲であっても、それは枷にはならなかつた。家庭での圭介を想像できなかつたし、したくもなかつた。二人の逢瀬は風のない湖面のように穏やかに過ぎていた。そんなふうに思つていたのは美沙だけだつたのかもしれない。
結婚という言葉よりも、妻と別れると言つた圭介のいつに

ないくぐもった声が、冬の軒先に見たつららを想い起こさせた。溶けた雪は屋根から落ちずに凍りつく。流れることのできない水は、容赦ない冷気の洗礼を受けてつららを形成する。根元は太く繋がり厚みを作り、伸びた尖端はますます鋭利さを増す。北側の軒一面に貼り付いたつららは、幼い頃の記憶とは切り離せない。「危ないから、近寄つたら駄目よ。あれが落ちたら、死んでしまう」と言つた祖母。そのときの顔をはつきりと思ひ出すことができる。

休日はシフト制のため定まっていないが、チーフという立場上ほぼ平日になる。今日が休日でなかつたのなら、と思つていつものように念入りに化粧をし、気を引き締め仕事場に向かつていくところだ。何事も深く考えずに目の前のことを処理していただくの一日になつていただろう。でも、考えなければいけない。今日こそ答えを出さなければならぬ。そのためには外へ行こう。圭介の匂いが満ちているこのマンションでは思考が麻痺してしまう。

手早く簡単な化粧をして、木綿の白いワンピースを身につけ、薄手のコートを羽織り仕事用のバッグを肩に掛けた。岩槻駅まで徒歩五分。東武野田線に乗り十分で大宮駅に着き、新幹線の改札に向かうコンコースを進んだ。待ち合わせ場所に使われる、豆の木のオブジェがある。その手前に、三歳くらいの女の子がぼつんと立っていた。赤いカーディガンの裾

を握りしめ、ぶつかりそうになる大人たちにはばまれながら、キョロキョロと見回している。美沙は足を止め、母親の姿を探した。横を見て振り返り、若い男の視線を認めた。同じように立ち止まっている。その男の後ろから二十歳そこそこと思える濃い化粧の女が走り寄り、女の子を抱き上げた。見届けて、また振り返ると、若い男は目尻を下げて親子を見ていた。

私も同じ顔をしているのだろうか。子供はかわいいが、産んだり育てたりしたいとは思つたことがなかつた。もし、子供を産んでいたら、この若い母親に近い年頃の子がいてもおかしくない。ああ、答えを出さなくてはならない。券売機に向けて足を速めた。

軽井沢駅のホームに降りた美沙は、息を深く吸い込んだ。この空気、この風は他の地では味合えない。温度の差や標高の違いだけとは思えない。幼い頃に、この軽井沢で祖父母と過ごした日々結びつくからだろうか。その懐かしい思いの中に引き込まれそうになりながら、階段に足を掛けた。改札口を抜け、若者で賑わうアウトレットモールのある南口ではなく北口へと向かう。まだ残雪を抱えている浅間山が、青空の中にくつきりと姿をみせている。タクシー乗り場を通り過ぎ、横断歩道を渡りおえたときだった。

「失礼ですが」

と、後ろから呼び止められた。口調に覚えがある。圭介だと思つた。初めて出逢つたとき、「失礼ですが、忘れ物ですよ」と紙袋を差し出されたのだ。買ったばかりのセーターの入った紙袋を置き忘れたことに気づいた美沙は、顔を赤らめたのだつた。

振り向いて圭介ではないことを確かめた。あの若者だつた。大宮駅で母親に抱き上げられた女の子を、緩んだ顔で見つめたあの若者だつた。

「突然、本当にすみません。僕、軽井沢つて初めてなんです」

長身だ。百八十センチ以上あるのだろう。美沙を見下ろすかたちになっている。

「はあ」

それで？　と言いたくなつた。

「あいにく、スマホの充電が切れてしまつて、どうしたらいい、どこへ行つたらいいのか、わからなくて」

言葉を選ぶように慎重に間を置きながら、美沙の顔を窺う。

「アウトレットでしょうか？　それなら、駅の反対側ですよ」

「買い物ではないんです。あなたは、軽井沢によく来ている人ですか」

「答えなければなりませんか」

「気を悪くしないでください。迷わずに慣れた足取りだつたので、つい、ついて来てしまいました。すみません」

「わかりました。では、どこへ行きたいのですか。それとも、交番を教えましょうか」

あえて切り口上の言い方にしたのだが、若者は動じなかつた。

「どこへ行けばいいのか、教えてください。僕は初めてなので、どこをどう歩けばこの町を好きになれるか、教えてください」

「それなら、どこに行つてもいい。どこを歩いても好きになれるから」

美沙は少し頭を下げて、さあ、これでおしまいというふうで、足早に歩き出した。邪魔はされたくない。今日こそは答えを出さなければならぬ。

駅を背に土産物店、そば屋などを通り過ぎた。祖母の好物だつた胡桃最中を商う店の前で、六本辻に行こうと思つた。

六本辻まで行けば、五月の連休明けの今ならどの道を選んでも人は少ないだろう。東雲の交差点を左に曲がる。舗装された道だが、別荘が左右にあるためか、湿り気のある土と草木のおいが満ちている。美沙が大きく息を吸い込み吐き終えると、後ろから声が掛かつた。

「軽井沢のホームでも、あなたは深呼吸をしていましたよね。」

ラジオ体操の深呼吸の七、八のときのように、両手を後ろにして息を吐いていましたよね」

あの若者だった。見られていた。この若者は私を見ていた。それは大宮駅のコンコースでも同じだ。迷子の女の子を見つけて母親を探そうと見回したときも、私を見ていたのだ。

「か、加藤ユウトといいます。大宮駅で目が合いましたよね。その人が、軽井沢で深呼吸していたから驚きました」

笑い顔は、まだ幼さを残している。

「何してるんだらうって思いましたけど、今はわかります。おいしいからですよ。五臓六腑にしみ渡るって感じですよ」

顔と胸を空に向け、両手を高く上げてからゆっくりと両手を左右に開いて下ろし、前で交差させた。美沙は、ふふつと笑った。深呼吸の真似をしたからではない。五臓六腑、という言葉が今どきの若者の口から、ポロリと漏れたからだ。「空気ですよ、おいしいのは。あなたもおいしい空気を味合うために深呼吸したんですよ。僕、変なこと言いましたか」

真顔になったユウトに、首を横に振った。悪人ではないだろう。

「いいえ。その通りよ。さいたまや都内とは違うでしょう。わかってくれてありがとう」

「よかつたら一緒に歩いてもらえませんか」

改めてユウトを見る。三十から三十五歳ぐらい、白いTシャツの上にグレーのパーカーと、カーキ色のパンツ。短めの髪にはくせ毛と思えるウエーブがかかっている。大きな黒目がちの目に筋の通った鼻。断ることは簡単だろう。一人で考えたいことがある、と言えはいいだけなのだ。でも、ああ、いつものように私は逃げている。いつもそうだった。肝心なときには他の人が答えを用意していた。高校も専門学校も、友だちに誘われるままに同じ学校を受験したし、今の仕事も教師に薦められるままに選んだ。そのまま美容部員を続けているのは、一緒にやめようと言う声がかからないからかもしれない。目の前の若者が答えを出してくれるとは思わないが、圭介に言われるままに頷くのもかもしれない。思いながらユウトに向けて頷いた。

「六本辻っていうの、ここは」

ユウトは立ち止まり道の数を確認している。

「まっすぐ行けば雲場池」

「やっぱり、あなたはこの町をよく知っているんですよ」

「祖父と祖母が住んでいたの」

「うらやましいな」

言いながら仰ぐように空に目を向けた。つられて見上げた。新緑の木々の上の澄んだ青空に浮いている雲を見て、あつ、とあげそうになる声を飲み込んだ。

「なんですか。どうしたんですか」

近づき、覗き込むように首をかしげたユウトの手は、美沙の左の二の腕に伸びた。その手を避けて身を引いた。

「なんでもない。思いついたことがあったの。つまらないこと」

「よかった。気分が悪いのかと思いました」

胸を撫で下ろしたかのように肩の力を抜いたユウトの表情は、大宮駅の親子に向けたものに似ていた。

「思いついたことって、なんだろう。ちよっと気になりますよ」

「言ったら笑われる。それより、どこへ行こうか迷っていたけど雲場池に行きましょう」

苔で覆われた低い土手に囲まれた道は木陰になり、陽が差さずに肌寒い風が吹いていた。二台の自転車車が二人を追い抜いて行った。

雲場池は湧き水からできた川をせき止めて作られている。

夏は涼風を運び、秋には紅葉を水面に映すことで鮮やかさを二倍に見せる。湧き水のため凍りつかずに辺りの雪の白さを強調させる冬。そして今は、水に映える若葉の淡い色とズミの蕾の赤味をたたえているかのように見える。

「名前のとおりですね」

風に立つ波に目を向けるユウトの横顔は、陽光を受けて眩

しげだった。

「え？」

「ほら、雲を映している、あんなに立体的に。雲の色さえそのままに見える。だからきつと、雲場池っていうんでしょうね」

「さっき、思いついたって、言ったでしょう。あなたが今、言ったこと、同じことを思いついたのよ」

「つまらないことって、これですか？ 心外だな。こんなに僕は感激しているのに」

笑顔になっていた美沙は、ユウトの強張った顔に、はっとした。

「怒っているわけじゃない。だって、僕の名前はユウトですよ」

優しくたたかう、と書いて、優斗だと言いながら、しゃがみ込むと、小枝を拾い土に名前を書いた。立ったまま、上から優斗の肩と首筋を見た。体は成熟しているが、まだどこかに幼さを隠し持っている。それがきつと同年代の異性からは謎めいて見えるのだろう、そんな気がした。

「よく来ていたのに、気づかなかった。町の人は、おみずばたって言っていた。私にも雲場池ではなくて、おみずばただったから」

「それなら、僕にとってもおみずばただな」

立ち上がった優斗が、さっきより大きく感じられた。

「中学生のときだったけど、憧れていた先輩に貰った鉛筆を宝物にしていたの。短くて芯も折れて使えなくなつた鉛筆だつた。それをおみずばたに投げたの。投げた訳も忘れたし、先輩の顔もあやふやになつてしまつたのに、深緑色の鉛筆がゆらゆら浮いていたことだけは、忘れられない。不思議よね」

「まだ、どこかに浮いているかもしれない」

口元を崩しながら池に向けた優斗の眼差しが、美沙の胸の奥底に眠っていた記憶を探り出した。あの一年上の先輩に、この人は似ている。

「女の子にもてるでしょ」

「でも、苦手なんです。いつも振り回されてしまう。振り回されて、疲れて、気づけば終わっている」

「そんなふうには見えないけど、そう信じてあげる」

「上から目線ですね」

「そうよ。私は頼まれた案内人だもの。うんと年上の」

そんなことないです、と言うだろう。口から出まかせでもよかった。だが、優斗は何も言い返さずに、美沙のほうを見ることもなかった。歩みを止めた美沙に気づかないのか、池に沿つて一人歩き始めていた。

私は何を期待しているのだろうか。振り回されているのは私

だ。知り合つたばかりの年下の男に何を求めているのだろうか。思考することから逃れるために同行しただけの人なのだ、それなのに、私はどうかしている。

水の流れる音が美沙の耳に届いた。池の水は川に流れている。その水音の中に祖母の声が聞こえたように思えた。「危ないから近寄つたら駄目よ。あれが落ちたら死んでしまう」一歩一歩後ずさり、池から遠ざかった。元の道に戻り、気をとりなおして歩き始めた。

六本辻に出ると左に折れて旧軽井沢の方へと進んだ。子供の頃にはまだ舗装されていなかったこの道で、祖母と手を繋いでいたときだった。

「幸せになるんだよ。幸せは自分の手で掴むものだから、掴んだら離さないようにしっかりと握り締めているんだよ」

繋いだ手に力を込めて言つた。強い握力を覚えている。小学生の美沙には、あまりに漠然としていて理解することはできなかつたのだが、今ならわかる。若い頃の祖母は、祖父の愛人問題で苦悩していたのだ。大人になつて母から聞かされて、子供だった母や祖母の辛かつた日々を知つた。今、私は人を苦しめている。母や祖母に憎まれる側にいるのだ。なぜ気づかなかつたのだろうか。いや、気づきたくなかつたのだ。私が覚えているのは仲睦まじい祖父と祖母だったから。祖父に看取られた祖母の最期は安らかだったから。

そう、おばあちゃん、わかったよ。おばあちゃんが私をここに連れて来たんだよね。圭介と別れる。別れなければいけないよね。

「ひどいな、黙って行ってしまふなんて」

走って来たのか、息を切らせた優斗の呼びかけだった。

「黙って歩いて行ったのはあなたのほうでしょう。もう案内人は必要ないのかと思った」

優斗は首を横に振ると、肩をいかせて息をした。

「そんなこと言わないでください。あやまります。振り返って、あなたがいなくてショックだった。あなたは僕にとつて、案内人なんかじゃない」

抱きしめられた。とつさのことなので美沙は呆然とされるがまだだった。胸の鼓動が届く。圭介以外の男の腕の中にいる、そう思った。これで圭介と別られる。もう、私は愛する資格を失くしたのだ。抗わない美沙に、優斗は唇を重ねてきた。

どれほどの時が流れたのか、美沙には判断がつかなかったが、ブルブルという機械的な振動を感じて我に返った。優斗の背中に回した手に伝わってくる。優斗のパンツの後ろポケットからの振動だった。スマートフォンだ。そうわかったと同時に、突き飛ばすように優斗から離れた。

「嘘だったのね。スマホの充電切れは」

優斗の視線が一瞬うろたえた。だが、改めて美沙の目を見定めると、

「あなたに近づいたための嘘です」

語気を強めて言い寄った。

「大宮駅から後をつけていました。ストーカーまがいのごことは初めてなので、何度もやめようとしたのです。でも、でも、あなたと話して、惹かれてしまった」

惹かれた？ 近づいたための嘘？ 私がもう少し若かったら、この言葉に酔えたのかもしれない。

「若いわ、あなたは。私は四十二歳。好きな人がいるの。今日はその人と別れるためにここに来たようなもの。おかげで、気持ちの整理ができた」

ひとしきり冷たい風が、二人の間を抜けていった。車が横を通り過ぎ、遠くから若い女たちの笑い声が聞こえた。右にも左にも別荘が続く。苔むす敷地には細い路が平屋の家まで伸びている。

優斗は、九十度ほどに腰を折り頭を下げた。

「もう一つ嘘をつきました。僕は加藤優斗ではありません。川井優斗です。川井圭介は僕の父です」

声は大きく、感情を封じ込めたかのように抑揚がなかった。言い終えてなお、顔を上げない。この人は何を言っているの

か、と思った。圭介が父……川井優斗……もう一つの嘘……
圭介が父……言葉が幾重にも重なり、やがてそれは今朝に見
た夢と同じく、けたたましい鳥のさえずりになった。耳を覆
いたい衝動にかられた。せめてこの場を立ち去りたい、と思
うが、手も足も動かない。鋭く尖ったつららが脳裏に浮かぶ。
その根元は厚く軒に凍りついて、反り出すように丸みをおび
ている。遠くで祖母が叫んでいる。が、聞こえない。鳥の鳴
き声が邪魔をしているのだ。目を凝らすと、祖母は手招きを
していた。行きたい。おばあちゃんの声が聞こえるように近
くに行きたい。「人の幸せをふいにすることなど、してはい
けない」おばあちゃんはそう言いたいのか。いままで私は、
相手の身になって考えることをしなかった。圭介の家族のこ
となど考えていなかった。
やがて、優斗は頭を上げたが、美沙を見ずにうつむいたま
ま、だった。

「苦しんでいる母を目の当たりにして、僕は何もできなかった。
父は優しい人だから、相手の女が悪いのだ。罵倒して侮
辱してやろうと考えていました。だから、嘘で近づいたんで
す。でも、あなたを憎みきることはできなかった。むしろ、
父があなたを愛した気持ちがわかります」

「私のやってきたことに比べれば、あなたの嘘なんてたいし
たことじゃない」

「許してくれるんですね」

すがるような視線を受けて、美沙はドキリとした。冷静に
ならねば、と思う。おばあちゃん、私に力を貸して。もう、
これ以上は人を不幸にしない。

「誤解しないで、許すとか許さないの話じゃない。たしかに
私はあなたやあなたのお母さんに憎まれる存在ね。でも、そ
んなこと考えたことはなかった。さっきのあなたのことだ
って、節制のない女のやりそうなことでしょう。そう、そう
いう女なの。あなたのお父さんとのことも同じこと。軽い気
持ちでつき合ってきただけ」

違う、と言いたげに優斗は首を振った。美沙は優斗から目
をそらし、道路脇の土手に生えた赤紫色のいかりそう碓草を見つけた。
花びらの尖った先端はつららを連想させる。

「それなのに、結婚しよう、って言ったのよ、笑っちゃうわ
よね」

「駄目です。何のためにあなたが嘘を並べているのか、僕に
はわかる。無駄です」

「本当にわかってしているの？ 迷惑だったのよ。結婚という言
葉を使えば、女は喜ぶとでも思っているのかな。最低の男よ、
あなたのお父さんは。その息子のあなたも笑えるくらい馬鹿
な男。もうこれ以上笑わせないでよ」

大声で笑って見せようとしたができずに、唇を震わせただ

けだった。まだ咲ききっていない碓草の茎を、美沙は力まかせにむしり取った。花を持った手が小刻みに揺れ続けた。優斗はその手を、食い入るように見つめていた。

「僕はこの町が好きになりました。どんなにこの町を好きでも、この町は僕を受け入れてくれない。こんなこともあるんです。時間をかけて諦めるしかないです。それでも、この町が好きだという気持ちは変わらない。本当に好きなんです」

優斗は深く頭を下げると、駅に向かう道を歩き始めた。残された美沙は碓草を持ったまま、いつまでも立ちつくしていた。

